

第二期中期計画研究プロジェクトの事後評価結果概要 及び第三期中期計画研究プロジェクト（社会インフラ復旧） の事前評価結果概要

- I. 第二期中期計画研究プロジェクトの事後評価及び第三期中期
計画研究プロジェクト（社会インフラ復旧）の事前評価に
ついて P. 2
- II. 学識経験者による第二期中期計画研究プロジェクトの事後評価
結果概要 P. 3
- III. 学識経験者による第三期中期計画研究プロジェクト（社会イン
フラ復旧）の事前評価結果概要 P. 8

I. 第二期中期計画研究プロジェクトの事後評価及び第三期中期計画研究プロジェクト（社会インフラ復旧）の事前評価について

平成18年3月に閣議決定された第3期科学技術基本計画では、重点4分野のなかに「ナノテクノロジー・材料」が取り入れられた。独立行政法人物質・材料研究機構(NIMS)の第二期中期計画(平成18年度～22年度)では、新たなブレークスルーの可能性を秘めているナノテクノロジーを用いた物質・材料研究に重点をおくとともに、安全・安心な社会基盤の構築及び環境・エネルギー問題に対応した材料研究を推進することとして、「1 ナノテクノロジーを活用する新物質・新材料の創成のための研究の推進」と「2 社会的ニーズに応える材料の高度化のための研究開発の推進」を重点研究開発領域に設定し、前者を4領域に、後者を2領域に分け、合計20プロジェクトを提案し、平成17年度に事前評価を実施し、その評価結果を反映して、平成18年度から研究プロジェクトを開始した。

研究期間が5年間の20プロジェクトについては、開始3年目の平成20年度に、外部評価委員による中間評価が実施された。これら20プロジェクトに加え、平成19年度に新規プロジェクトとして開始された1プロジェクトを併せた21プロジェクトは、第二期中期計画期間が終了する平成22年度で研究を終了した。

この間、平成20年10月31日付けで「国の研究開発評価に関する大綱的指針」(内閣総理大臣決定、以下、大綱的指針)が改定された。これに基づき、文部科学省において「文部科学省における研究及び開発に関する評価指針」(平成21年2月17日、以下、評価指針)が平成21年2月17日付けで改定された。独立行政法人物質・材料研究機構(NIMS)においては、これらに沿って、平成21年11月2日付けで「独立行政法人物質・材料研究機構における研究開発課題評価実施要領」(以下、評価実施要領)の改訂を行った。

研究終了後の平成23年度に、評価実施要領に基づき、これら21プロジェクトの研究成果の取りまとめ及び第三期中期計画(平成23年度～27年度)研究プロジェクトへの反映、並びに国民への説明のために、事後評価を行った。事後評価では、学識経験者によるピアレビューを行い、学問的視点からの評価を実施した。

一方、平成23年3月の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴う大きな情勢変化を踏まえて、科学技術基本計画の再検討が行われた。平成23年8月19日に閣議決定された第4期科学技術基本計画では、「震災からの復興、再生の実現」が、我が国としてまず取り組むべき喫緊の課題とされた。平成23年3月1日に決定されたNIMSの中期計画・中期目標も見直され、新たに、重点研究開発領域の「2 社会的ニーズに応える材料の高度化のための研究開発の推進」において、「1) 環境・エネルギー・資源材料領域」に、平成24年度から「社会インフラの復旧、再生に向けた構造材料技術の開発」1プロジェクトの追加実施が計画された。これについては、平成24年2月の独立行政法人評価委員会物質・材料研究機構作業部会、続いて同科学技術・学術分科会、同総会で意見聴取が行われ、NIMSからの文部科学大臣への中期計画変更認可申請、文部科学大臣と財務大臣の間での中期計画変更協議・回答を経て、平成24年3月30日に文部科学大臣より正式に認可された。そのため新規開始プロジェクトについては、学識経験者による書面事前評価を実施し、研究目標、研究計画等のブラッシュアップを行った。

なお、評価実施要領については、第三期中期計画に伴い、平成24年4月11日に再度、改定を行った。

以下、平成22年度で終了した第二期中期計画研究プロジェクト21課題の事後評価の概要、及び平成24年度から開始した第三期中期計画研究プロジェクト(社会インフラ復旧)1課題の事前評価結果の概要について述べる。

Ⅱ. 学識経験者による第二期中期計画研究プロジェクトの事後評価 結果概要

1. 評価方法

平成23年11月22日から平成24年2月14日にかけて、第二期中期計画期間において開始し終了した21プロジェクトを6領域〔「1 ナノテクノロジーを活用する新物質・新材料の創成のための研究の推進」の4領域（：1）ナノテクノロジー基盤領域、2）ナノスケール物質領域、3）情報通信材料研究領域、4）生体材料研究領域）、と「2 社会的ニーズに応える材料の高度化のための研究開発の推進」の2領域（：1）環境・エネルギー材料領域、2）材料信頼性領域〕を参考に8評価グループに分け、ピアレビュー事後評価委員会（「[第二期中期計画研究プロジェクトの事後評価委員会（学識経験者、スケジュールと構成）](#)」参照）を開催した。事後評価委員会メンバーは、合計24人（内訳：大学19名、公的研究機関3名、民間会社2名）の学識経験者であり、21プロジェクトについて詳細な事後評価を受けた。

事後評価委員は、NIMSともプロジェクトとも利害関係がなく、かつ評価の継続性を確保するため、できるだけ中間評価委員（4年間プロジェクトについては中間評価がないので、事前評価委員）を候補とし、1評価グループ（1プロジェクト～3プロジェクト）あたり、3名の事後評価委員を委嘱した。

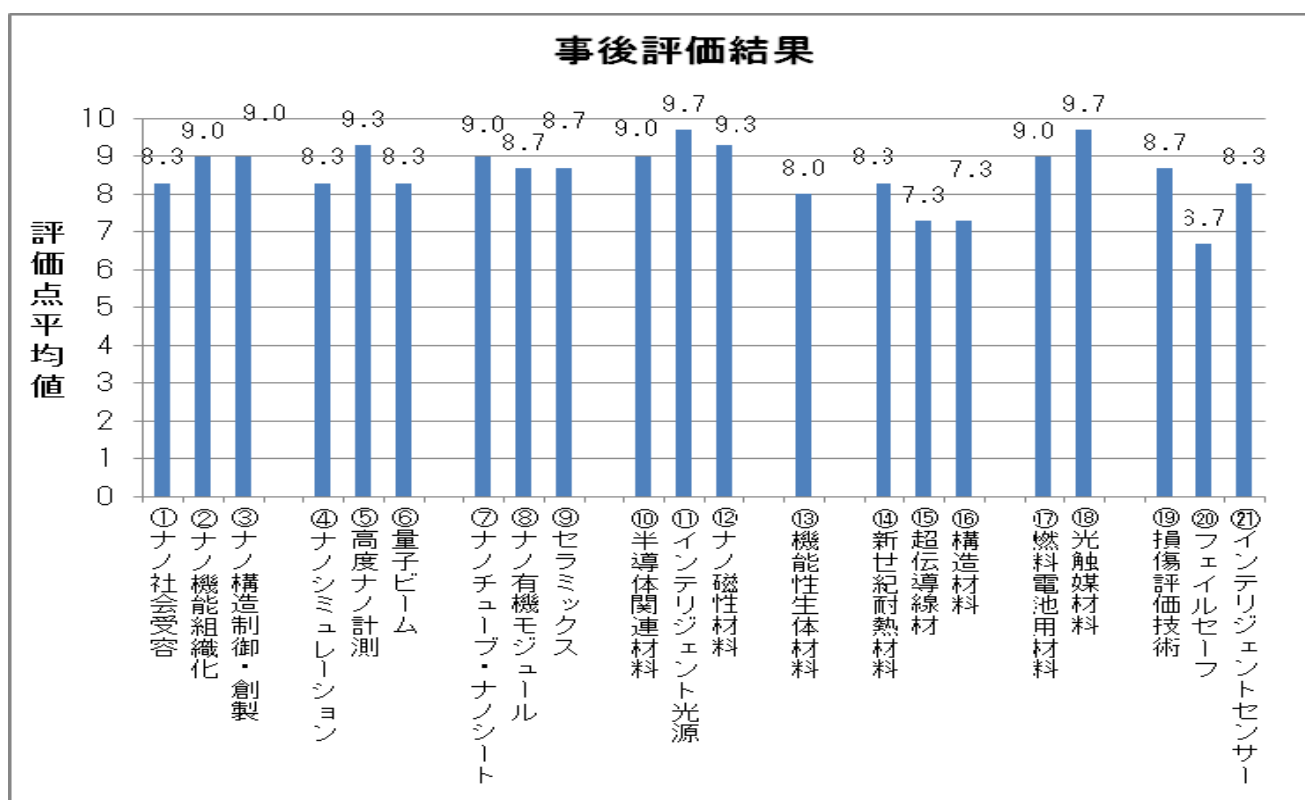
事後評価資料一式〔中間評価報告書（4年間プロジェクトは事前評価報告書）及び評価結果に対する対応表、成果一覧を含む事後評価説明資料、口頭説明用パワーポイント図〕は予め、事後評価委員に郵送し、事前に内容の把握、質問点の整理をしてもらい、事後評価委員会を効率的に運営した。

ピアレビュー事後評価委員会（会場：NIMS目黒地区会議室）では、プロジェクト責任者による説明、評価委員とプロジェクト責任者による質疑応答、それに続く事後評価委員による評価票の記入が行われた。評価項目は4項目で、①研究計画、実施体制、マネージメント、連携、②研究開発の進捗状況及び具体的目標の達成度、③論文・特許等の直接の成果（アウトプット）、効果・効用（アウトカム）、波及効果（インパクト）、④総合評価、で評価項目ごとにコメントを記入してもらい、最後に評価基準に基づいてプロジェクトに対する総合評価点を記入してもらった（10点満点）。

取りまとめられた事後評価結果は、事後評価委員による修正・追加・了承を得た後、評価実施要領に基づきプロジェクト責任者に開示され、事実誤認の十分な根拠のある場合は、プロジェクト責任者は1回に限り事実誤認の申し立てをすることができ、事後評価委員会に申し立て個所の再検討をお願いした。また、個人情報や特許等の知的財産情報に対する配慮を行った。10点満点法による3人の事後評価委員の総合評価点は平均され、小数第二位以下が出た場合は四捨五入した（総合評価点平均値は次項図中）。なお、総合評価点と評価基準は以下の通りであった。10点(S)：全ての点において模範的に優れていた。9点(S)：多くの点において非常に優れていた。8点(A)：総合的に優れていた。7点(A)：優れたプロジェクトであった。6点(A)：平均的なプロジェクトであった。5点(B)：一部の計画の見直しが必要であった。4点(B)：期待されたほどではなかった。3点(B)：計画を見直して実施すべきであった。2点(C)：プロジェクトの見直し、計画の抜本的な変更が必要であった。1点(C)：大きな問題があり、プロジェクトを中止すべきであった。

2. 21プロジェクトの事後評価結果

21プロジェクトの総合評価点の平均値を、8グループの事後評価委員会毎に下図に示す。



事後評価委員会による詳細なプロジェクト事後評価報告書は、別途、ホームページに掲載してあるが、各プロジェクトに関する主な評価コメントを以下に簡単に記載する。

重点研究開発領域「1 ナノテクノロジーを活用する新物質・新材料の創成のための研究の推進」

「1) ナノテクノロジー共通基盤技術の開発領域」(リスク・創製・加工関連)と(計算・計測関連)：

「①ナノマテリアルの社会受容のための基盤技術の開発」(平成19年度～22年度プロジェクト)：フラレンナノウイスキーによる超伝導転移、またそのウイスキー構造との関係に関する学術的な理解も進みつつあるなど、世界的なレベルでの成果が得られており、今後の新たなプロジェクトへの発展が期待される。査読論文、学会発表、特許出願等、十分な成果が挙がっており、またプレス発表を通じた成果の公表も十分なされている。細胞への影響や各種の生体影響を国際的関連組織でもチェックするようにして欲しい。

「②ナノ機能組織化技術開発の研究」：目標設定は具体的であり、世界レベルで見ても十分に高かった。その上で、すべてのグループでプロジェクトは順調に進展し、当初の目標を達成したばかりか、単分子メモリ技術、原子スイッチ技術、テラヘルツ波放射技術、ボルテックスピリヤード、ダイヤモンド超伝導体など、革新的な成果を挙げた。走査型マルチプローブ顕微鏡がNIMS独自でなされていて、その計測の需要も高まっているので、国際的に応じられるよう、体制整備(人、設備)を望む。

「③高度ナノ構造制御・創製技術の開発」：中間評価での指摘を受けて、研究期間の後半ではNIMSのオリジナル技術である液滴エピタキシーによる量子ナノ構造創製の高度化を中心に、発展が期待できる研究テーマに重点化されていて、マネジメントが正しく行われた。液滴エピタキシーの方法論が改善され、発光特性の大幅な向上が図られ、ひずみのない量子ドットとしての独自の特長を生かしながら、光学特性も既存のひずみ系と遜色のないレベルに高度化されており、評価される。NIMS独自の自己成長技術を生かした、一体的、一貫的なテーマであるが、今後の長期的な観点で新しいテーマも構想してゆく必要があるのではないか。

「④新機能探索ナノシミュレーション手法の開発」：計算と実験の比較を行い、実験系ヘフィードバックをかけるなど連携を進めているほか、UCLA との連携で第一原理計算の適用範囲を大きく拡大するオーダーN 法を開発するなど、国際連携による重要な計算技術開発の成果も十分に得られている。“計算手法の開発”が目標であるようなので、難しいかもしれないが、具体的な新機能探索の例として、新機能を持つ物質などが見つかり、非常にインパクトの強い成果になると思うので、今後に期待したい。

「⑤ナノ物質・材料研究のための高度ナノ計測基盤技術の開発」：5年後の世界レベルの目標設定が妥当であって、それを前半の3年で要素技術の克服、後半の2年間にアSEMBルしてシステムとして完成という計画で着実に達成させたことによって、その成果は多くの授賞、特許出願、サイテーションの多い論文を多く出せたことに繋がった優れたプロジェクトである。今後は、ここで得られた成果をどのように活用し、それをベースにナノ計測技術をさらに充実させていくかという点が重要であろう。このためにも若手の育成に留意されたい。

「⑥ナノ物質・材料の創製・計測のための量子ビーム基盤技術の開発」：プロジェクト名が示す通りに、放射光による高速化を特徴とする計測技術、中性子線による透過力、軽元素敏感を活用した計測技術、及び解析ソフトの開発に留まらず、イオンビーム、原子ビームを用いた、材料の創製技術に関しても多くのシーズ技術が見出されており、成果の挙げたプロジェクトだと評価する。それぞれの量子ビームが順調に進歩しているので、今後はその合わせ技としての解析も増えてくると期待する。

「2）ナノスケール新物質創製・組織制御領域」：

「⑦ナノチューブ・ナノシートの創製と機能発現に関する研究」：新規のナノチューブ・ナノシートの開拓に加えて、実用化に繋がる大量合成法の開発やコンポジット形成技術についても重要な成果が得られている。一流国際ジャーナルへの成果発表が多数なされており、いくつもの成果が表紙カバーを飾るなど高い評価を受けている。世界レベルの質を持った研究成果の証といえる。

「⑧ナノ有機モジュールの創製」：全体的に見て、無機・金属系の研究が中心であるNIMSの中で、有機系の研究を進めるユニークなプロジェクトであるが、NIMSの材料研究の幅を広げレベルを押し上げるのに大いに貢献しており、国際的研究機関としての知名度を上げるために十分役割を果たしたといえる。多彩な研究者が高分子や超分子の分野において個々に成果を挙げている。統一的にミッションを持っているわけではないが、有機・高分子材料の新分野を開拓するというミッションはある程度成功していると考えられる。今後、他の無機・金属グループとの連携、有機グループ内での連携により、さらにユニークな研究を進めてゆけると考えられる。

「⑨ナノ粒子プロセスの高度化によるイノベティブセラミックスの創製に関する研究」：セラミックスのプロセッシングでは世界をリードする成果を得ており、目標を上回る成果を達成している。今後のステップアップにおいては、本プロジェクトの結果からナノ粒子プロセスの高度化のために解決すべき共通の科学的課題を慎重に抽出して、これを基礎科学的に研究するグループをつくって基礎固めをするとともに、それを踏まえた研究展開を進めていくことを考えてほしい。

「3）ナノテクノロジーを活用する情報通信材料の開発領域」：

「⑩半導体関連材料に関する基礎・基盤研究の多面的展開」：NIMS ならではの材料学的な見地から、半導体デバイス用材料と界面制御に関する知見を集積し、実用可能な材料系の開発とデータベースの構築を目指したもので、NIMS として特徴のあるプロジェクトとなっている。次世代ゲート絶縁膜材料やメタルゲート膜材料に対する精密な評価を行い、材料開発の考え方を提起した点や、系統的な実験を行い、その結果をデータベースとして提供したこと、埋もれた薄膜材料の欠陥評価技術の実用性を実証するなど、当初目標は十分に達成されている。NIMS だけでは不可能な側面の研究開発を、外部、国外との連携によって、より大きな成果に結びつけており、マネージメント的にも成功したプロジェクトと判断できる。全体的に波及効果が大きい優れた成果が得られており、高く評価できる。今後は、材料の研究として深めると同時に、このうち有望なものをデバイスの研究開発につなげ実用化に貢献することを期待する。

「⑪オプトセラミックスのナノプロセス技術によるインテリジェント光源開発」：基礎から応用、製品化まで非常に幅広い領域をカバーしており、海外も含め外部機関との連携も活発になされ

ている。短波長光源を中心に、製品化につながる優れた成果が数多く得られており、高く評価できる。酸化物 LED など一部サブテーマは積み残しているが、これは世界中で実現されていないことである。他のサブテーマの目標達成度は高く、また、当初予定になかった成果が派生的に得られ、事業化されつつあるものもある。

「⑫ナノ構造制御による高機能ナノ磁性材料の創製」：極薄記録磁性層材料、Dy フリー磁石など、現在の環境・技術課題に対応した、優れた新しい材料の開発に成功している。これらは研究計画に沿ったものであり、達成度は高い。実施体制については、専任研究職の数は必ずしも多くなかったが、得られた研究成果や波及効果などの点では、むしろ優れた研究プランに基づいたプロジェクトと考える。研究内容からすると、より多くの特許化の可能性があると思われるので、今後は実用化展開を主眼としたプロジェクトへの進展を期待したい。

「4）ナノテクノロジーを活用するバイオ材料の開発領域」：

「⑬ナノバイオ技術による機能性生体材料の創出」：独自の材料であるアパタイト人工骨の実用化は特筆すべき成果であるといえる。競争がより激化すると予想される分野なので、国際競争力向上のために、臨床ターゲット（具体的な疾患）がより明確になるとよい。100件以上の特許出願と約70件の特許登録は評価できる。今後特許戦略の体制を整え、企業との連携により実用化を推進してほしい。大学や産業技術総合研究所などとの人事交流を積極的にすべきである。次世代の研究者育成のために、特に若手研究者同士の人事交流は重要であろう。新しい研究の芽が生まれてくると考える。

重点研究開発領域「2 社会的ニーズに応える材料の高度化のための研究開発の推進」

「1）環境・エネルギー材料の高度化のための研究開発領域」（構造材料関連）と（機能材料関連）：

「⑭新世紀耐熱材料プロジェクト」：Ni 基単結晶超合金の高性能化（耐熱温度・耐酸化温度の向上）とタービン翼等への実用化は順調に進展しており、また、基礎的なコンセプトに基づいた EQ コーティングの TBC への適用など、新しい研究も進んでいる。国の研究系独立行政法人である物質・材料研究機構が開発した Ni 基単結晶超合金が航空機用のジェットエンジン用材料として実用化され、現在、大きな話題となっているボーイング787ジェット機に搭載されることは、大変重要な成果である。本分野は我が国のエネルギー事情を考えた場合、継続すべき重要な領域と考える。

「⑮ナノ構造制御による超伝導線材の高性能化」：個々のサブテーマについてアピールしている成果は、いずれも世界的でレベルが高いものである。特に、NIMS が世界をリードしている金属系 Nb₃Al 線材の開発については Jc が2倍程度向上しており、外国の研究機関との共同研究を行っている点が評価できる。超伝導の A~Z を網羅した研究になっている。しかし、新物質の探索から応用まで範囲が広すぎて、どこに目標を絞っているのかわからない。実用化に向けた研究は別の体制・枠組みでの取り組みが必要と思われる。

「⑯ナノマイクロ組織制御による構造材料の高性能化技術の構築」：サブテーマごとの材料において、細かく計画・体制を修正するなどして十分な成果が得られるようにマネジメントを行ったことは評価できる。各種金属材料の特性改善に関する基礎研究に取り組み十分な成果が得られている。数値目標だけにこだわらずに基礎的研究の継続が重要と思われる。論文・特許に関しては十分なアウトプットが得られている。また著名ジャーナルに論文が掲載されるなどして波及効果も大きい。構造材料の実用化にあたっては通常15～20年程度の期間が必要とされる。ここで得られてきた成果を発展させるためにも引き続き継続的にこの分野での研究を行うことが NIMS には期待される。

「⑰ナノ構造化燃料電池用材料研究」：希少金属を代替する材料を提案するサブテーマが多く、燃料電池、水素精製の分野に強いインパクトを与えるプロジェクトであり、その成果も出つつある。今後この基礎研究で得られた結果を実用レベルまで引き上げることが必要である。基礎研究が主であるので耐久性など長期にわたるデータはまだそれほど得られていないが、NIMS のこれまでの実績、ノウハウから今後さらに多くの材料が開発されると思うので、これらから実用化できる新規な材料の創製が期待される。

「⑱高機能光触媒材料の研究開発」：進捗状況は極めて良好であり、目標は非常に高いレベルで達成された。世界的なレベルとしても、極めて高いと評価できる。世界レベルの論文誌（Nature,

Nature Materials, Angew. Chem. など)での採択が数多くなされており、また、特許登録数も多い。これらの情報発信で世界の研究もさらに進むものと期待される。特に Advanced Materials 誌に掲載された「ナノ光触媒の可能性と挑戦」は特記に値する。複数の企業で商品化や実用化が進んでおり、十分な効果、効用があると判断できる。

「2) 高信頼性・高安全性を確保する材料の研究開発領域」:

「⑱構造材料の時間依存型損傷評価技術の構築」: NIMS の強みであるクリープ特性評価技術を中心にして、疲労、腐食に関する研究を推進する体制が整備されている。特に、ギガサイクル疲労に関する論文数が世界1位であることは注目されると同時に、このようにベンチマークにする姿勢を評価したい。学術論文、学会発表、特許等、アウトプットは相当数あるが、学術雑誌の IF (インパクトファクター) で見る限り必ずしも高いとは言えない。発電プラント、製造プラント、社会インフラ等の安全性確保は今後益々重要になってくる。NIMS の金属構造材料に関する更なる取り組みに期待している。そのためには、構造材料の信頼性評価に関する技術の継承と発展を担う人材の確保と育成が緊急の課題と思われる。

「⑳フェイルセーフハイブリッド材料」: 「フェイルセーフ」という概念を提案し、貝殻の構造にフェイルセーフ材料の開発指針を求め、CFRP、セラミックス、コーティングにおいてフェイルセーフ材料を開発するという目標に対して、先導的な成果を挙げたと評価される。許容応力以上で消費する仕事量をフェイルセーフファクターと定義しているが、許容応力は材料評価の客観的基準ではないので、今後もさらに検討することを望む。本プロジェクトで取り扱った材料が実用材料となるには、多くの課題が残されていると思う。今後の進展に期待したい。

「㉑インテリジェントセンサーデバイスに関する基盤研究」: 安心・安全を標榜した研究で、非鉛圧電材料の開発を始め、各種センサーの開発や材料開発において、すぐれた成果を挙げている。センサーデバイスとしての特性評価まで含めて、ダイヤモンド DUV 光センサーの成果は高く評価される。その他のサブテーマは、センサーデバイスとしての特性評価にまでは至っていないが、革新的なセンサーデバイスに有用な新材料や新プロセスを開発しており、その点は評価される。欲を言えば、当初計画のセンサーのマルチ化がもう少し進めばよかった。

3. 評価結果の活用

終了した第二期中期計画プロジェクトの事後評価結果については、評価コメントに基づいて対応を考え、関連する第三期中期計画プロジェクトの研究計画・研究内容・研究目標等のブラッシュアップに反映した。そのほか、外部の公募型研究や NIMS 内のシーズ育成研究の応募や計画策定にも活用した。

Ⅲ. 学識経験者による第三期中期計画研究プロジェクト（社会インフラ復旧）の事前評価結果概要

1. 評価方法

Iに述べたように、重点研究開発領域の「2 社会的ニーズに応える材料の高度化のための研究開発の推進」において、「1）環境・エネルギー・資源材料領域」に平成24年度から「社会インフラの復旧、再生に向けた構造材料技術の開発」1プロジェクトの追加実施が計画された。

評価委員は評価実施要領に基づき、利害関係のない4名の学識経験者（「[第三期中期計画研究プロジェクト（社会インフラ復旧）の事前評価委員会（学識経験者、スケジュールと構成）](#)」参照）（所属内訳：大学2名、民間会社・研究所2名）をお願いした。この追加プロジェクト1課題は、文部科学大臣から正式に認可されたのが平成24年3月30日のため、研究開発の目的・目標・方向性、研究計画等のブラッシュアップを書面による事前評価により平成24年4月～6月に実施した。書面評価では、評価資料一式を評価委員に送付した後、評価作業をしていただける土日と2回挟んだ2週間ほどで評価票の記入をお願いした。評価項目は、①プロジェクトの目的・ミッションステートメント、②プロジェクトの意義、③プロジェクトの内容、ロードマップ、推進体制、マネジメント、予算計画、④見込まれる直接の成果（アウトプット）、効果・効用（アウトカム）、波及効果（インパクト）、⑤総合評価、である。取りまとめられた評価結果は、評価委員による了承を得た後、評価実施要領に基づきプロジェクト責任者に開示された。プロジェクト責任者からの事実誤認の申し立てはなかったが、書面評価による説明不足や疑問を解消するため、評価結果に対するプロジェクト責任者からの回答書が事務局を通して評価委員に送られ、了承された。また、個人情報や特許等の知的財産情報に対する配慮を行った。10点満点法による4人の評価委員の総合評価点は平均され、小数第二位以下を四捨五入した結果、8.3（SABC表記では、A）となった。

2. 追加プロジェクトの事前評価結果

事前評価委員会による詳細な評価報告書は、別途、ホームページに掲載してあるが、主な評価コメントを以下に記載する。

「①社会インフラの復旧、再生に向けた構造材料技術の開発」：3つのサブテーマ毎に設定した研究目標は明確かつ具体的であり、これまでのNIMSの経験と実績からこれらの多くは実現可能であると判断される。応用から実証試験までを含む本プロジェクトを4年間の限定期間内に達成(完了)させることが重要である。重要となる指標は、①実用化に資する開発・応用研究の成果、②企業との共同研究への発展、企業への技術トランスファーの実績、③実用化の実績、④特許、である。実用化のネックとなる技術課題の抽出とその課題解決の具体的なシナリオ、プロジェクト終了時（平成27年度）の具体的実証試験とその後のシナリオ、社会への具体的な提案内容を充実させることを望む。また、実証試験や実用化に必須の企業を含めた連携体制の更なる具体化・強化を期待したい。本プロジェクトが目指す構造物の抜本的な安全・安心設計に関しては、①予想される災害の規模に対する構造物の信頼性向上、②構造物が被災した際のダメージのミニマム化、③被災した構造物の迅速な復旧・機能回復の3つの出口に対して、これまで蓄積されたNIMSシーズを迅速かつ確に生かすための道筋を明確に示す必要がある。安心安全な社会基盤の構築に貢献する研究プロジェクトで成果の波及効果は大きい。学術論文よりも特許や企業との共同研究開発へ繋がるのが期待できる。何より国の研究機関としての使命にかなったプロジェクト提案である。全てのサブテーマのゴールが平成27年度であるのは、サブテーマの横並び感があり、プロジェクトの緊急性を考えると若干違和感がある。短期的に成果に結びつけるべきサブテーマも少なくないため、もう少しスピード感のある計画になると良い。NIMSシーズの応用が主のプロジェクトであるため、プロジェクト開始時点で体制ができているべきと考える。

3. 評価結果の活用

第三期中期計画追加プロジェクトの事前評価結果については、評価コメントを進行中の「社会イ

「インフラの復旧、再生に向けた構造材料技術の開発」プロジェクトの研究計画の詳細化やスピード感のある取り組み、企業との連携体制の強化、研究内容の更なる明確化、目標達成手順の整理等のブラッシュアップに反映した。